

芥川龍之介『素盞鳴尊』における素盞鳴表象 ―神から人間へ造形し直した試みについて―

Representation of Susanoo in “Susanoonomikoto” Writed
Ryunosuke Akutagawa:
On the Attempt to Reshape from God to Man

赤松 優香

Yuka AKAMATSU

要旨

芥川龍之介の小説、初出版「素盞鳴尊」と改訂版「老いたる素盞鳴尊」では『古事記』に大筋をとり『日本書紀』に具体的な名称を取って書かれている。しかしそれらの模倣を超えて大きな変化が加えられていることは見逃せない。それはスサノヲが神ではなく人間として描かれていることである。つまり神話ではなくなっているのである。それによって、『古事記』の展開にあったイザナキ、アマ

テラスに関連した追放、ヤマタノヲロチ退治、オホアナムチへ試練を与えオオクニヌシへと成長させる、大きな英雄の姿とは異なる姿が描かれた。本作は神々の存在を効果的に用いて、素盞鳴が渴望した「爐辺の幸福」を手放す、その「偉大」な瞬間を描こうとした作品であると考えられる。以上のように、従来のイメージに変化を与える新しい素盞鳴像が描かれたことに『素盞鳴尊』の特異性、及び意義があると考え、本論を進める。

キーワード…『古事記』 芥川龍之介 英雄 「野性」 人間 神 巡

礼 「爐辺の幸福」

はじめに

芥川龍之介（一八九二～一九二七）の小説「老いたる素盞鳴尊」の典拠論については拙論¹⁾で述べたところである。

まず、今回取り扱う芥川龍之介の小説について概略を述べておく。「素盞鳴尊」「老いたる素盞鳴尊」の両小説はもともと「素盞鳴尊」という題で大阪毎日新聞（大正九年三月三十日から六月六日まで）上に連載された新聞連載小説である。題の分かれている理由は芥川が『春服』春陽堂（大正十二）において前半の「素盞鳴尊」を削除し、後半十回を「老いたる素盞鳴尊」と改題、修正を加え収録したためである。そのため前半の「素盞鳴尊」は『芥川龍之介全集』にのみ収録されている。しかし芥川の「素盞鳴尊」は構想に約二年もをかけている²⁾。加えて草稿からの大幅な修正³⁾、また薄田泣菫、岡栄一郎、佐藤春夫らへの手紙⁴⁾から垣間見える、苦勞を交えつつも中絶していない点⁵⁾からも、この作品は重要であると言える。本論はもととも同一の連載小説だったことを踏まえ、削除された前半部を含めて芥川の《素盞鳴尊》と称し、検討の対象とする。そしてどのようにスサノヲが描きだされているのか述べていくことを本論の目的とする。なお、今回は大正九年に「大阪毎日新聞」誌上で連載された初出のものをテキストに用いることとする。

漢字表記の場合は芥川の《素盞鳴尊》の素盞鳴であり、カタカナで名前を表記する場合は、日本神話で表象されている神のことを指し

て用いることとする。《素盞鳴尊》は近代文学におけるスサノヲ表象という視点でも、大正期において早い時期に登場した作品である。その意味でも、大正期において、また芥川がどのようにスサノヲを捉え、造形し直したのかを検討することは、スサノヲ、神話、享受の研究において意義深いことであると考えられる。作品について「手帳二」には次のように残されている。

素盞鳴尊 —— 1) Revolt 2) Maturity 3) Elder⁶⁾

早澤正人は各単語をそれぞれ「反抗」、「成熟」、「老年」と訳している。当該作品は芥川にとつてスサノヲを中心に据えた一代記とできるだろう⁸⁾。このことから本来接続していたものの、切り離されて別の話となった「素盞鳴尊」と「老いたる素盞鳴尊」を連続した作品としてまとめて扱う意義があると考え、今回は取り扱っていく。

ではそもそもスサノヲとはどのような神として見られてきたのか。一般におけるスサノヲのイメージを確認するため、スサノヲ研究で著名な斎藤英喜の論に触れておきたい。斎藤は、「怪物と戦う英雄神は欠かせないキャラクター」として日本神話では「大蛇退治のスサノオ、出雲のオオクニヌシ、あるいは悲劇の王子ヤマトタケルが英雄神のベスト・スリー」だと述べている。日本神話ではスサノヲは「母の喪失と希求」、「『大人』になりきれない無垢で粗暴な姿」として語られ、ヤマタノヲロチ退治の神話で英雄となる。「出雲の地で、自分と同じような荒ぶる力を持つオロチを打ち倒すことは、自分のなかのもう一人の自分を克服することを意味」しており、英雄と怪物との類似から英雄となるのである。つまるところ、「自

分と似た〈異常なる存在〉を打ち消すことができたとき、英雄へと変貌していく」とするものである¹⁰⁾。

このようにスサノヲは荒ぶる神であり、英雄神でもある。嵐、海原の神、暴れ者、英雄、そしてときに幼さといったイメージのあることを確認することができた。これらが凡そのスサノヲの特徴であると言える¹¹⁾。

このようにしてスサノヲはイメージを付与されてきた。《素盞鳴尊》に関する先行研究では素盞鳴の英雄化ひいては人間化——ここでの人間化とは神であるスサノヲを前提として人間へ描きなおす試みのことであり、スサノヲと違い、寂しがり、恋をし、墮落して父へと成長もする、人間らしい存在に描き直されていることである。『古事記』に照らしたとき、素盞鳴が木々を泣き枯らすなどの能力を持たず、ただ剛力な人間であることは特異なことである。一部の先行研究では素盞鳴の英雄化をめぐる作品の評価が分裂している。それは素盞鳴が人間であり神として英雄にならないことに由来する——による成否をめぐる、賛否両論がある。論者はこの先行研究の観点を引き継ぎつつ、素盞鳴の人間化によって、新しいスサノヲイメージが提出されたのではないかと考えている。《素盞鳴尊》では「爐辺の幸福」という触れえぬものを希求して素盞鳴が漂泊し、そこで得たものを手放す展開になっている。その希求したものを手放す瞬間こそが「偉大」な存在として表象されているのではないかと考え、論を展開していく。

一、先行研究の検討

芥川龍之介《素盞鳴尊》の小説の先行研究で注目したのは作品の成否の分裂である。それは前述したようにスサノヲの人間化をめぐる是非に由来すると考えるためだ。《素盞鳴尊》を評価する者や評価する立場に立たない者、つまりスサノヲの人間化を問題としない立場としては村田秀明や清水康次、田中千晶などが挙げられる。特徴としては芥川史として意義ある作品であるとする見方が大勢とすることができるよう。反対に、評価しない、人間化を問題視する立場としては長野省一や羽鳥徹哉、川副武胤、遠藤浩などが挙げられる。ここでの見方の特徴としては、上代のスサノヲの魅力を喪失している、上代という奥深い呪術的世界観を破壊してしまっているとする意見が大勢である。《素盞鳴尊》に関する先行研究は多くあるが人間化に言及しないものもある。片岡懋は「一応素盞鳴尊という一人の人間を展開の相に於いて描いたものと云えます」と述べ、あとは「素盞鳴が人間であることを説明した」と言及しているのみである¹²⁾。また鶴田欣也は「非凡な腕力がある人間として描かれ」といって述べ、作品としての特異性には言及するものの、作品そのものの成否は示していない¹³⁾。そして榎本敦史も作品の成否には言及がなく、「芋粥」の五位との関連を問題にしており、人間であることにことさら言及はしていない¹⁴⁾。最後に廣田卓也は「老人」と「青年」という関係から素盞鳴尊を「老人」は「青年」によつては乗り越える存在としたの働きを担われている」と述べ、やはり作品の成否には言及しない¹⁵⁾。

このように以上の論文では素盞鳴が人間であることは自明なこととして扱われている。素盞鳴の人間化を問題にせず作品の成否に言及しない論のあることがわかる。しかし今回は人間化を主題とするためその点で問題とするもののみ挙げる。例えば否定派である長野菅一は次のように述べている。

芥川がスサノヲに注目したのは「ユーディット」による影響が挙げられるが、「ユーディット」に登場するホロフェルネスと比べ、素盞鳴は雄大さ、壮大さ、絶倫さなどで欠けているとしている。芥川が「神代小説」¹⁶を目指すならば、恋愛と戦闘——この二つは古代の叙事詩を華やかに色どる二大要素であり、描き切るべきである。素盞鳴の心理解剖や知的な分析は不要で、セリフと力強い行為の描写、背景となる自然描写のみの方が、線が太くてはるかに効果的で、神経が細くセンシブルで傷つき易い英雄には、英雄としての魅力がないと述べている。¹⁷

「素盞鳴尊」の発端には長野菅一が述べたような「ユーディット」からの影響があるだろう。それは「ホロフェルネスの超人振りやユーディットの『自然苦』を指摘し、こういう傑作に比べれば日本の文壇人の作品などはなっていないと極言し、自分はもう一度初めから出直したいという決意を披れきしている」という長野の指摘や「ユーディット」を読んだ時期（大正七、二、五）と芥川の「日本武尊」の構想時期（大正七、四、二十四）、「素盞鳴尊」（大正七、七、三十一）¹⁸との接近性からも考えられる。しかし《素盞鳴尊》の「我が素盞鳴」はそれらとは決別する。目指した「神代小説」ではない素盞鳴を表現したと見るべきだろう。¹⁹

芥川が「神代小説」を意識していたとするならば長野が指摘する

ようにホロフェルネス的な素盞鳴像が理想と言える。しかし作品テクストとして見たときに現れてくる素盞鳴は「爐辺の幸福」を求める、人間であり父親という存在である。その観点では雄大さ、壮大さ、絶倫さなど《素盞鳴尊》の描写はホロフェルネスの造形とは異なる。そしてそのような素盞鳴を末尾で「彼の多端な生涯を通じて、如何なる瞬間よりも偉大であつた。」と収束させていくことでホロフェルネス、及び「ユーディット」、力への憧れと決別したと言えるのではないか。

同様の観点で注目したいのが先に挙げた遠藤浩、川副武胤である。紙幅の都合もあるため簡単にまとめていく。

遠藤浩は「儀式」が「遊び」になってしまったことにより『古事記』のスサノヲ像と比べ失敗していると述べている。これは作中冒頭の遊びが、力比べとなつていくことから単なる遊びではなく、集団の統率者を決める神聖な儀式であつたとする見方による。そして民俗学に照らすと冒頭の場面で王権交代と人殺しと祭りが交錯するはずであつたが、芥川によりこの場面は遊びになつてしまった。冒頭後、素盞鳴の追放によって共同代に蓄積した罪穢を解消できたはずが、結局素盞鳴を、自分探しをする近代的若者に変えてしまったとする。また、素盞鳴の恋について、恋した少女と話すこともできない、追放後も高天原のはずれに残つただめ男にしてしまった。そのために、どうにもつまらない英雄ができたってしまったとするのである。²⁰

以上のように述べている。このことから遠藤は素盞鳴が人間化されたこと、ひいては展開が民俗学や呪術的世界観から離れてしまったことに問題意識を持つていることがわかる。遠藤の論では、人間

のままでは素盞鳴は「つまらない英雄」ということになる。しかし論者は《素盞鳴尊》において素盞鳴を人間とすることで、遠藤が述べるところの「つまらない英雄」である人間としての素盞鳴を表現し得たと考える。それは先に述べた通りであり、また後に詳述する。

どちらも上代の呪術的視点が抜けてしまったこと、ひいては素盞鳴や葦原醜男が人間化したことを問題視している。長野尊一や遠藤浩の論はスサノヲの人間化を失敗とする視線を暗に含んでいると言える。そして芥川も同様に考えたからこそ前半部分を削除し、後半部を修正して残したのだろう。

次に評価する論、評価という立場に立たない者の論を確認する。なかでも注目したいのは清水康次と田中千晶である。清水は「野性」の可能性に引き寄せて《素盞鳴尊》について次のように述べている。

「外の世界を変容させるほどの素盞鳴の内面の嵐」、つまり野生みのある存在として素盞鳴を位置づけ、実行しない思兼の知性と対比して行為者として位置づけている。はじめ「野性」は反社会的で、反逆的な力だったが、結末へ至るにつれ孤独な漂泊者、闘争者の内面を支える力に成長するとしている。そのため、前半部の素盞鳴について「内面的な煩悶に特徴があった」と述べる。そして後半部を対比して「煩悶や苦悩を経ることのない自我を、確固とした自我と呼べるだろうか」と批判的に述べ、前半部を「具体的な人間像として、現実感を持った形象に作りかえることが試みられていた」と評価している。加えて、素盞鳴の生は世間や群と相容れないとして、大気都姫の場面は「野性」を鈍らせるのであり、寂しさを乗り越えていかなければ素盞鳴の「野性」は鈍ってしまうのだとしている²¹。

気になるのは苦悩や煩悶を「確固とした自我」とし、「野性」を

評価する視点である。たしかに前半部の素盞鳴はより人間化されていたと言えるだろう。それは、心理描写がより丁寧で恋をして墮落するという精神性を持ち合わせているためだ。後半部では気に入らない男に対する殺意とその実行があり、精神や思考がより単純な存在とされているように見える。しかし後半部の素盞鳴もやはり苦悶、煩悶していたのであり、後半もまた人であり、父としての人間を描写する試みが続けられていたと考えるべきだろう。それは次の場面からもうかがえる。

彼の心はいつの間にか、妙な動揺を感じていた。それはちょうど晴天の海に似た、今までの静かな生活の空に、嵐を先触れる雲の影が、動こうとするような心もちであった。(連載回数三十八) ※傍線部は引用者による。以下同。

素盞鳴は色を変えて、須世理姫の顔を睨みつけた。が、それ以上彼女を懲らす事は、どう云うものか出来なかった。(中略) 宮の階段を上りながら、忌々しそうに舌を打った。

「いつものおれなら口も利かずに、打ちのめしてやるどころなだが——」(中略)

その夜素盞鳴はいつまでも、眠につくことが出来なかった。それは葦原醜男を殺した事が、何となく彼の心の底へ毒を刺したような気がするからであった。

「おれは今までもあの男を何度殺そうと思ったかわからない。しかしまだ今夜のように妙な気のした事はないのだが——」

彼はこんな事を考えながら、青い匂のする菅畳の上に、幾度となく寝返りを打った。眠はそれでも彼の上へ、容易に下ろうとはしなかった。

その間に寂しい暁は早くも暗い海の向うに、うすら寒い色を拡げ出した。(連載回数四十三)

先に引用したのは須世理姫が葦原醜男を伴って現れる場面であり、次に引用したのが、葦原醜男を火で殺したと素盞鳴が思い込んでいる場面である。どちらも素盞鳴が単純な精神性をしているのではなく、父親としての葛藤、悩みを持ち得ていたことが読み取れる場面になっている。

こうしてみると、むしろ後半の父親、人間としての素盞鳴を強調するための前半と解釈できるのではないか。鶴田は次のように述べている。

他の向う側の作品が現実の中にマジカルな空間を創り出し、ていこうとするのに対し、『素盞鳴尊』は逆に神話時代というマジカルな空間を理性化し、現実化しようとしている。主人公の疎外感を導き出すのに二十二章も使っているのはその好例である。

鶴田が指摘するように、人間として、現実味を持たせるための前半だったところからも言えるだろう。²² そうすると、また後述するが清水の言及する「具体的な人間像」というよりも「偉大」な一人の人間、父親像として後半もまた注目されるべきではないだろうか。

次に田中千晶の論を確認する。田中は「素盞鳴尊」における素盞鳴を、「時には挫折する青年」であり「孤独を抱えた一人の人間として捉え、その形成過程を描くこと」を意識したのではないかとしている。それは作品末尾で「成長の結果を記していることから根拠づけら」れるとしている。²³

田中は作品の成否には言及せず、著者が素盞鳴をどのように描いたかに注目する。この読みには一部納得するが、老年期への言及がないことは問題に思われる。成否に言及しないことは先に挙げた片岡や鶴田、槇本、廣田と同様だが、田中の論は素盞鳴が人間化されたことを自明視せず強い意識を持つている点で異なっている。

以上のように、先行研究では、『素盞鳴尊』を批判する論、肯定する論、中立の論いずれにしても素盞鳴の人間化がひとつの争点になり得ると考える。端的に示すならば、批判派はササノヲの人間化によって『古事記』のような英雄でなくなっていること、呪術性を失っていることを批判し、肯定する論、中立の論はササノヲの人間化を意識しつつ具体的に人間として描こうとしたと見ることができ。本論では先行研究の論にあるササノヲの人間化、素盞鳴の一代記である、という争点を引き継ぎつつ、その観点から素盞鳴を人間として表現することにどのような意義があったのかを検討すべく、作品を解釈していくものとする。そこでまず、そもそも『古事記』と『素盞鳴尊』でどのようなイメージの違いが生まれているのか、細部を比較して整理しておきたい。

二、先行研究、及び《素盞鳴尊》におけるスサノヲのイメージ

二―一、『古事記』と《素盞鳴尊》の比較検討

まず、『古事記』と《素盞鳴尊》との流れの差異を以下の表にまとめる。その前に、拙論において典拠の一つとして『日本書紀』を挙げたにもかかわらず、なぜ『古事記』と比較するのか述べておきたい。それは拙論でも述べた通り、『日本書紀』は要素として参照しているのであって大筋は『古事記』に依拠しているためである²⁴。前回の論では語彙の比較検討を主に行ったため、今回は流れの比較検討を行う。

表では適宜、傍線と波線をふつてている。傍線は論者が重要視して『古事記』と類似しているも異なっていると判断した箇所、波線は大きく異なっていると判断した箇所²⁵にふつてある。

では先に誤解を生じさせないため今回の比較において登場する名前の中で混乱を生む可能性のあるもののみ、整理しておく。比較するテキストとして用いるのは初出である「大阪毎日新聞」夕刊、そして倉野憲司校注『古事記』岩波文庫（一九六三）、井上光貞『中公クラシックス日本書紀Ⅰ』中央公論新社（二〇〇三）である。以降、『古事記』『日本書紀』について言及するときは以上のテキストを用いる。

「素盞鳴尊」での名称	素盞鳴	須世理姫	葦原醜男
『古事記』に記載のある名前	須佐之男	須勢理毘売	大穴牟遲 葦原色許男 宇都志國玉神
『日本書紀』に記載のある名前	素盞鳴	記載なし	大己貴神 大物主神 国作大己貴命 葦原醜男 八千戈神 顯国玉神

『古事記』	伊耶那技伊が左の鼻を洗った際、建速須佐之男が成り、海原を治めるよう詔る。 しかし須佐之男は成人後も青山が枯山に、河海が乾すほどに啼き、万の物の妖を発す。伊耶那技が理由を尋ねたところ、母の国に参りたいと答え、伊耶那技は激怒し須佐之男を追放する。 高天原の天照大御神へ暇乞いに赴くも、「わが国を奪はむとおもほす」と疑われ須佐之男は「あは邪き心なし」と告げる。それを受けて天照大御神は「なが心の清く明きは、いかにして知らむ」として誓約 ^{うけい} をする。	「素盞鳴尊」	春、天の安河の河原で大勢の若者が力競べをしている。素盞鳴は何をやっても非凡な力業で結果を見せるが、そのあまりの強者ぶりゆえに冷遇疎外される。
-------	--	--------	--

<p>誓約の結果、須佐之男は「勝ちさびに天照大御神の宮田のあを離ち、その溝を埋み、またその大嘗聞こしめす殿に屎まき散らしき。」ついに服屋の棟に穴をあけ馬の皮の剥いだものを落とし入れ、驚いた機織女が死んでしまう。</p> <p>天照大御神が天岩戸に隠れる。八百万の神の協議の結果、「千位の置戸を負せ、また髭と手足の爪とを切り」追放される。</p>	<p>素盞鳴の孤独。素盞鳴の腕力に嫉妬する一団と崇拝する一団とができる。</p> <p>素盞鳴は美しく快活な部落の娘に恋をするも、伝えることができない。</p> <p>思兼尊と手力雄尊は素盞鳴の野蛮さに好意や愛惜を示す。</p> <p>素盞鳴を崇拝する牛飼の若者が恋の仲介を申し出る。若者が素盞鳴から勾玉を預かり少女へ贈ろうとすると、素盞鳴を敵視する風流な若者に丸め込まれ、勾玉を他の玉と取り替えて少女に贈るも拒否される。</p> <p>このことが素盞鳴に知られ、激怒。それを発端とし両派入り乱れての大騒動になる。</p> <p>多勢に無勢の素盞鳴は生け捕られる。死刑を求める部落に対し、思兼尊と手力雄尊が反対。罰として髭と手足の爪を抜き、石を投げられ、犬をけしかけられて追放される。</p>	<p>空腹を訴える須佐之男のために食べ物を用意する大氣津比売の行いの様子を見て、食べ物を汚していると殺害。</p>	<p>放浪の果てに女だけが住む穴居部族に出会い、その主人大氣津姫とその妹たちと放浪な生活を送る。そこは常に死臭が漂っている。</p> <p>一年後女達の愛情は黒犬へと移り、素盞鳴は嫉妬から犬を殺そうとするも誤って大氣津姫を殺害。逃げ出す。</p>
--	--	---	---

<p>出雲の肥の河上、鳥髪に降りたところ流れてくる箸を見つめる。さらに河上を捜し求めると、老夫婦と童女の泣いているところに遭遇する。哭くわけを尋ねると高志の八保大蛇に毎年娘を食われ、またその時がきたのだと答える。そこで「なが女はあに奉らむや」と尋ね、大蛇退治に「計を案じる。大蛇退治後、得た太刀を天照大御神に献上する。」</p>	<p>七年の漂泊の末、出雲の簸の川のほとりで一人泣く櫛名田姫に出会う。櫛名田姫の父、足名椎は部落の長であり、部落に流行り始めた疫病の原因を巫女に占わせたところ櫛名田姫を大蛇の贅としなければ部落全体が死に絶えるというお告げがあった。素盞鳴は櫛名田姫を救うべく大蛇退治を誓う。そこで大蛇の気配がやつてくる。</p>	<p>出雲の須賀に到り、「あが御心すがすがし」として宮を作り「八雲立つ」と和歌を詠む。家系が進み、大穴牟遲が誕生する。</p>	<p>大蛇を退治した素盞鳴は櫛名田姫と結婚し、部落の長となって出雲の八広殿に住む。</p> <p>素盞鳴は「転落ち着いて優しくなり、何人か妻をめとり多くの子を成し、威勢をふるう。そして高天原から来た若者に大蛇退治で得た剣を故郷の人々に渡すよう預ける。かつての荒々しさを時々蘇らせながらも静かな晩年を送る。</p>	<p>八十神から助けてもらうべく大穴牟遲が須佐之男の所に参ると、須勢理毗売が出てきて二人は情を通じ結婚する。</p>	<p>ある日、舟に乗った葦原醜男が食料を求めて来島、須世理姫と恋仲になる。</p>	<p>葦原色許男は須佐之男から様々な試練を受けるが、須勢理毗売や鼠に助けられる。</p>	<p>素盞鳴は娘が奪われることを不快に思い、様々な試練を課すが、葦原醜男は須世理姫の協力を得て、どの試練にも堪える。</p>
--	---	---	--	--	---	--	--

須佐之男が寝入ったときに、須勢理毗売を負い、生太刀と生弓矢と天の沼琴を持って逃げる。黄泉ひら坂まで追いかけた須佐之男は、その太刀と弓で八十神を打ち払い大国王と名乗り、須勢理毗売を正妻にし、宇迦の山の山本に居れ、と謂う。

素盞鳴がうたた寝している内に、若い二人は舟に乗って海へ逃げ出す。目覚めた素盞鳴は高麗剣を抜き、海辺を見渡せる小山まで急ぐ。そして次第に怒りが消え、「おれはお前たちを呪ぐぞ。おれよりも強くなれ。おれよりも賢くなれ。さうしておれよりも仕合せになれ。」と若い恋人同士をこぼいでやる。その彼の姿は、多端な生涯を通じて如何なる瞬間よりも偉大であつた。

以上の差異が見られる。まず芥川の素盞鳴は人間であり、イザナキは登場しない。従つてアマテラスに別れを告げに高天原に赴くのではなく、『素盞鳴尊』では人の住む高天原という国から話が始まる。さらに『古事記』では身の潔白の証明による喜びから乱暴狼藉を働いているが、『素盞鳴尊』では部落での確執、スサノヲの恋が騒動の発端となつており大日靈貴——アマテラスのこと。改訂版では最後の場面に名前のみ登場する——は不在である。またタヂカラヲやオモヒカネの扱われかたも変わっている。その後の追放の方法も異なっており、オホゲツヒメとの話は言うまでもなく拡張されている。この神話部分に関しては『日本書紀』と大きな違いがあり『日本書紀』をあるいは柳田國男以上に読み込んでいた芥川に限って知らなかったということはないだろう。以上の差異から素盞鳴の人間化、および人間としての成長が強調されているとして、素盞鳴の人間化について考えたい。

まず確認しておきたいのは前述した通り、従来スサノヲといえ

母性への欲求や粗暴、英雄神といったイメージが強かった。それを『素盞鳴尊』では大きく転回し、母親を強力に欲求しない、意味のない乱暴をしない、『古事記』の英雄らしくない素盞鳴が描写されている。これもまた人間化に伴う大きなイメージの変化と言えるだろう。ではどのような素盞鳴像が提出されているのか、検討していきたい。

では次から傍線、波線部に注目しながら、論を進めていく。

二二、神ではなく人間化される素盞鳴

『古事記』冒頭の場合、スサノヲが神として超常的に誕生する場面は『素盞鳴尊』ではなく、故郷が異国である——「母の遺物」であり、「海の向うにいる玉造が七日七晩磨いたという玉」（連載回数十五）——ということだけが示され、その生まれについては記述がない。神であれば必要な生まれの系譜や超常的な生まれが記述されないこともまたスサノヲ人間化の試みの一環であり、生まれによって権威化しないことが目的にあると言えるだろう。連載回数二一、四では次のように、「人間」という言葉が用いられている。

彼はこう云ふ點になると、實際何處までも御目出度く出来上つた人間の一人であつた。（連載回数二二）

それには既に勝負の興味が、餘りに強く彼等の心を興奮の網に捉えていた。だから彼等は二人の力者に、代る代る聲援を與えた。古來その爲に無数の鶏、無数の犬、無数の人間が徒らに尊い血を流した、——宿命的にあらゆる物を狂氣にさ

せる聲援を與えた。(中略)、彼はそれを両手に抱くと、片膝砂へついた儘、渾身の力を揮い起して兎も角も岩の根を埋めた砂の中からは抱え上げた。(連載回数四)

このように性格づけられ、通常では考えられないほどの剛力ではあるものの、あくまで人間であるのだと冒頭で明示されている。

続いて、イザナキによる追放がなくなることによる大日靈貴の不在、そして素盞鳴の恋愛場面である。芥川は手紙で「素盞鳴尊の恋愛が書けないで殆ど閉口してゐます」「御目にかけるスサノヲの尊は今行き悩み体どうもスサノヲが女に惚れる所がうまく行かない」と手紙で述べている。前者は三月二十七日の書簡、後者は四月二日のものである。このことからわかるように、前者にいたってはまだ連載がはじまつておらず、後者ははじまつてわずか四回の時点の悩みである。いかに素盞鳴の恋を必須と見ていたかがわかる。その、人を恋しがる連載回数六でも、人間という言葉が使われている。次の通り。

葦木の交る針金雀花、熊笹の中から飛び立つ雉子、それから深い谷川の水光りを亂すす鮎の群、——彼は殆ど至る所に、仲間間の若者たちの間には感じられない、安息と平和とを見出した。其處には愛憎の差別はなかった。すべて平等に日の光と微風との幸福に浴してゐた。しかし——

しかし彼は人間であつた。(連載回数六)

このように自然に親しみを覚えつつ、それだけでは満たされない

人を恋しがる人間としての素盞鳴が描かれている。

しかしその恋愛はあえなくも散る。思兼は「火を弄ぶものは、気をつけないと、——素盞鳴ばかりではない。火を弄ぶものは、気をつけないと——」(連載回数二十二)と語っており、思兼の姪が素盞鳴の恋を弄んだことがわかる。「あの娘は——何しろあふ娘ですし、——白鳥は山鴉になどと、——失禮な口上ですが、——受け取らないと申し——」(連載回数二十)とあり牛飼いの若者にも希望は薄いということはわかっており、それ以外にも思兼の姪が素盞鳴に気を持たせるような言動を取りつつも、「醜い山鴉が美しい白鳥に戀をして、ありとあらゆる空の鳥の晒い物になつたと云ふ歌」(連載回数十八)が流行つたとあるように、意図的に素盞鳴の思いを軽薄に扱つたことは間違いないだろう。そのようにしてまで悲惨に素盞鳴の恋が描写されるのは、素盞鳴が人間になるためである。

恋に破れ高天原を追放されなければ人間としての素盞鳴の存在が薄れてしまい、成長する素盞鳴を描くに足りない。高天原では素盞鳴は孤独で自然に親しみつつも、人を恋しがり、幸福を求める人間でなければならぬのだ。大日靈貴が大きく登場すると恋に破れる素盞鳴という主題が逸れてしまい、加えて大日靈貴の不在は素盞鳴の人間としての存在感を強調し神としてのスサノヲを削ぎ落とす効果を生んでいると言える。

加えて、素盞鳴追放の場面でも、念押しのように人間という言葉が使われている。連載回数二十三にある。

これは同時に又思兼の尊が、むぎむぎ彼程の若者を殺したくない理由でもあつた。のみならず尊は彼ばかりでなく、すべ

て人間を殺すと云ふ事に、極端な嫌惡を抱いてゐた。(連載回数二十三)

このことから、素盞鳴がその剛力でもって騒動を起こしても、それはあくまで人間の範疇に収まる出来事であると思兼によつて示される。素盞鳴に関して人間という言葉が使われなくなるのは、大気都姫の場面からであり、墮落した素盞鳴を人間として強調する必要がなくなったためだ。日本神話で神は墮落しない。高天原で素盞鳴について人間という言葉が頻出するのは、高天原という一般に神の国と認識される空間、そして素盞鳴の剛力、自然への親しみが素盞鳴を人間離れした存在にしまいかねないことによる処置であり、高天原において素盞鳴はあくまで人間であると示され続けなければならなかったのだと考える。

続けて、大気都姫の場面での墮落について考える。悲惨な失恋と残酷な追放を受けた素盞鳴が墮落したのは人間として不自然なことではない。高天原について大気都姫に尋ねられた素盞鳴は「鼠が猪より強い所だ」と返答する。そして素盞鳴が大気都姫にここがどんな場所か尋ね返すと大気都姫は「猪が鼠より強い所」(連載回数二十六)と返す。つまりここでは力の強いもの素盞鳴が肯定され、望むものが与えられる環境であり、そこに浸っていたいと望むのは当然のことだろう。

興味深いのは「死穢」「腐臭」と「老婆」である。この老婆は同居していることから大気都姫の母と見れるだろう。大気都姫と素盞鳴が体の関係を持っていたであろうことは明白で、ならば老婆は素盞鳴の義理の母になる可能性がある。加えて『古事記』を思い出すと、

スサノヲの母、イザナミは黄泉の国にいる。⁽²⁸⁾『古事記』で黄泉の国に関してはイザナキの「穢き國」(p.28)や黄泉の国に登場する「黄泉醜女」、イザナミの「蛆たかれころきて、頭には大雷居り、胸には火雷居り、腹には黒雷居り、陰には拆雷居り、左の手には若雷居り、右の手には土雷居り、左の足には鳴雷居り、右の足には伏雷居り」という描写、そして「吾に辱見せつ」(p.262)というイザナミの認識がある。《素盞鳴尊》では大気都姫たちと洞穴について次のように描写されている。

既に朝日の光を受けて、まるで彼を見下しながら、聲もなく昨夜の狂態を嘲笑つているように見えるのであつた。この山々と森林とを眺めてゐると、彼は急に洞穴の空氣が、嘔吐を催す程不快になつた。今は爐の火も、瓶の酒も、乃至寢床の桃の花も、悉く忌はしい腐敗の匂に充滿してゐるとしか思はれなかつた。殊にあの十六人の女たちはいづれも死穢を隠すために、巧な紅粉を装つてゐる、屍骨のような心もちさへした。

(連載回数二十七)

イザナキは愛するイザナミを迎えに行き、そのさまを拒絶し逃げたが、スサノヲは母を求めた。しかし《素盞鳴尊》の素盞鳴は「死穢」など『古事記』でイザナミのいる黄泉の国を連想させる空間を拒否する。老婆の視線などはその点、興味深い。大気都姫と戯れる素盞鳴に老婆は「皮肉な流し目を送つて」(連載回数二十六)おり、女たちに見向きされなくなった素盞鳴へ「忍びよつて、両手に彼を抱きながら艶めかしい言葉を囁」(連載回数二十九)いたのである。

『古事記』のスサノヲなら歓迎すべきところであつたかもしれないが、素盞鳴は醜さを拒絶する感性を持つている。

加えて義理の母関係から老婆をイザナミ、大気都姫とその妹たちを黄泉醜女から着想を得たと考えると、素盞鳴は『古事記』のイザナキ同様に拒絶したことになる。これは素盞鳴が人間であるからであり、黄泉、つまり死——あくまで素盞鳴の精神的なものと考える——を拒絶するのは自然なことである。そこには安息があるのかもしれないが、素盞鳴はそこで一年以上を過ごしたのちに、洞穴へ別れを告げる。辛い経験による墮落、それによる安息を人間として素盞鳴は必要とした。それが人間としての素盞鳴であつたのである。

そして一年にわたる素盞鳴の苦しみを洗い流すように大雨がふる。しかし大雨は素盞鳴を癒しきることはできなかった。素盞鳴には「今まででない一筋の皺がいつの間にか一年間の苦しみの痕を刻んでいた」²⁹。素盞鳴はやはりあくまで人間なのである。

ここでの描写で興味深い火雷命の登場、そして七年にわたる漂泊の追加だが、それらについては三章で述べる。

最後に触れるのは、大蛇退治の場面の削除である。この場面はスサノヲ神話中でもっとも有名な場面としても良いだろう。だからこそ、『素盞鳴尊』では描かれなかったと考えることはできないだろうか。素盞鳴の造形を人間とするうえで、剛力は可としても超人的な大きさ、力は不要である。そのためにこの場面は大蛇の氣配を漂わせるだけで終わつたのではないだろうか。次に当該場面の引用を挙げる。

「そうです。とう／＼來たやうです。神々の謎の解ける時が。」

彼は對岸に目を配りながら、徐に高麗劍の柄へ手をかけた。するとその言葉がまだ終らない内に、驟雨の襲ひかかるような音が、對岸の松林を震わせながら、その上に疎な星を撒いた、山々の空へ上り出した。(連載回数三十五)

以上である。しかし後述する火雷命よりの高麗劍といい、神々の謎といい、大蛇が到来する様子は雰囲気十分に描かれ、日本神話を知っている者ならばこの後の展開は描かれなくとも問題ないだろう。素盞鳴が大蛇に倒される可能性はありえず、あまりリアリティックに大蛇退治を描写すると素盞鳴が人を超えてしまうか滑稽化してしまう。

同様なことは大日靈貴の不在にもいえる。素盞鳴の勝ちさびによるアマテラスの岩戸籠りは神話中で有名な場面である。このように、あくまで人間として表現されるためにスサノヲの、神として有名なエピソードは排除されたのではないか。より素盞鳴を人間化すべく、斎藤英喜が述べたところの「英雄神のベスト・スリー」、つまり神話的な英雄にしないために必要な処置だつたのではないかと考える。

ここまで論じてきたことをまとめると、素盞鳴には超常的であり権威的でもある生まれの描写がない。そして恋愛をする存在であり、墮落もし、腐敗や醜さを拒絶する感性を持ち、漂泊によって櫛名田姫の場面で自ら選択し動いたように、成長しうる存在ということになる。それでは、以上の描写から、『素盞鳴尊』がいかにも人間として表象されてきたかを確認することができたと考える。多くの『古事記』との差異は素盞鳴を人間化するためのものだったといえるだ

ろう。そうして素盞鳴を人間化することで、長野尊一が述べるところの「魅力がない」、そして遠藤浩の述べる「つまらない英雄」が完成したことになる。しかしそのようにただ英雄として失敗として捉えるのはこの《素盞鳴尊》の素盞鳴造形は惜しいのではないかと論者は考える。前半部を用いて、素盞鳴がただの人間であることを強調し、その効果が後半部に活きているとは考えられないか。素盞鳴の人間としての到達点と、この作品におけるスサノヲを人間化することの意義について次章で触れていく。

三、素盞鳴と思兼の対比表現

——「素盞鳴尊」における素盞鳴の剛力と歩行、

その悩みについて——

三——思兼の歩行、そして素盞鳴へのその思考の反映

先行研究は悩める近代的な青年としてのスサノヲを焦点化してきた。その点では、清水康次の素盞鳴の悩みとしての「野性」——内心の葛藤に「野性」をみている——、そして力としての「野性」への注目は興味深い。「外の世界を変容させるほどの、素盞鳴の内面の嵐。爆発的な力を持った、内面のカオスが素盞鳴の『野性』の形である」「『野性』は、社会の秩序や人間関係の虚偽とは無縁なものとして想定されており、反社会的な、反逆的な力として現れている」という文章からも精神性としての野性、そして力としての「野性」への視点がうかがわれる。

しかしこと力について言及するならば、その剛力は、部落での確

執、素盞鳴の恋心が弄ばれたことによって振るわれるものであり、結果的に「反社会的」になったのに過ぎず、それが目的ではない。素盞鳴の力はいくまで当人によつて、当人のためにふるわれるのである。しかし清水が言及するように素盞鳴の力、葛藤という「野性」——後述するが論者は加えて、風の囁きも含まれると捉える——が七年の漂泊を支える力になったのは事実である。そこで本章では清水とは異なった手法で素盞鳴の悩みを注視し、《素盞鳴尊》において人間化した素盞鳴がどのように描かれているのか、その到達点は何だったのか検討していく。そしてその補助線として二章で後述するとした《素盞鳴尊》で特徴的な漂泊、火雷命に注目していく。

そのために次から思兼と素盞鳴の歩行について考えていく。それは作中で主として自然への親しみや歩行といった共通性を二者がもっているためである。しかし、思兼は理知的な人物として、素盞鳴はそれに対比的な存在として描かれている。では思兼を検討することを通して素盞鳴の輪郭を明らかにすることとする。

思兼は素盞鳴と比べ、思索的という点で対照的だ。思兼が自然に親しみ、一人山中を歩いている描写や山中で素盞鳴にその考えを聞かせる場面がある。次に挙げる。傍線は思兼の歩行の場面や注目したい思考内容である。

彼（素盞鳴…論者注）が例の如くたつた一人、山の中の古沼へ魚を釣りに行つてゐると、偶然其處へ思兼の尊が、これも獨り分け入つて來た。（連載回数十二）

尊はもう髪も髯も白くなつた老人ではあるが、部落第一の學者

でもあり、豫ねて又部落第一の詩人と云ふ榮譽も擔つていた。その上部落の女たちの中には、尊を非凡な呪物師のやうに思つてゐるものもないではなかつた。これは尊が暇さへあると、山谷の間をさまよひ歩いて葉草などを採して来るからであつた。(連載回数十一)

「近頃はあなたの剛力が、大分評判のやうぢやありませんか。暫くしてから思兼の尊は、こう云つて、片頬に笑みを浮べた。『評判だけ大きいのです』」

「それだけでも結構ですよ。すべての事は評判があつて、始めてあり甲斐があるのですから。」

素盞鳴にはこの答が、一向腑に落ちなかつた。

「さうでせうか。ぢや評判がなかつたら、いくら私が剛力でも――」

「更に剛力ではなくなるのです。」

「しかし人が掬はなかつても、砂金は始から砂金でせう。」

「さあ、砂金だとわかるのは、人に掬はれてからの上ぢやありませんか。」

「すると人が、ただの砂を砂金だと思つて掬つたら――」

「やはり唯の砂でも砂金になるでせう。」

素盞鳴は何だか思兼の尊に調戲はれてゐるやうな心もちがした。が、そうかと思つて相手を見ても、尊の皺だらけな目尻には、唯微笑が宿つてゐるばかりで、人の悪さうな景色は少しもなかつた。

「何だかそれぢや砂金になつても、つまらないやうな氣がしま

すが。」(連載回数十二)

「魚は人間より幸福ですね。」

尊は彼が竹の枝を山目の顎へ通すのを見ると、又にやにや笑ひながら、彼には殆ど通じない一種の理窟を並べ出した。

「人間が釣を恐れてゐる内に、魚は遠慮なく釣を吞んで、榮々と一思ひに死んでしまふ。私は魚が羨しいやうな氣がしますよ。」

(中略)

「釣が吞めるのは魚だけです。しかし私も若い時には――」

思兼の尊の皺だらけな顔には、一瞬間何時にない寂しさうな色が去来した。

「しかし私も若い時には、いろいろな夢を見た事がありましたよ。」(連載回数十二)

以上の記述から思兼が自然に親しみを持ち、一人で山を歩き回ることゝ抵抗のない人物であることがわかる。

興味深いのは砂金と魚に関する話である。これはその後の素盞鳴を見透かしたやうな発言ではないか。論者の読みでは、素盞鳴は『古事記』のやうな英雄にはならない。つまり砂金の場面で素盞鳴が述べた「砂金になつても、つまらない」という発言は英雄になつてもつまらない、ということだとは見られないだろうか。評判がなければ英雄にはならない。実質があつても、その行為を英雄とするのは評判であり周囲の認識なのである。この点で思兼から素盞鳴は、無意識下で英雄になることへ無意味さを感じさせられていると考え

る。

また魚の場面、「若い時にはいろいろ夢を見た事がありましたよ」という思兼の発言は知識人ゆえの英雄への憧れとその挫折であったともとれないだろうか。榮々と死ぬ魚とは、思考を行為に移す「行為者」たることへの夢だったのではないだろうか。先んじて述べたおけば、これは結末部の《素盞鳴尊》における素盞鳴像ともつながってくる言葉である。

思兼が「行為者」や英雄にならないのは、部落で戦いが起きたときの連載回数二十二の場面からもわかる。ここでは思兼が月を楽しんで描写がある。次の通り。

此時部落の後にある、草山の楡の木の下には、髯の長い一人の老人が天心の月を眺めながら、悠々と腰を下してゐた。物静な春の夜は、藪木の花のかすかな匂を柔かく靄に包んだ儘、此處でも唯梟の聲が、丁度山その物の吐息のやうに、一天の疎な星の光を時々曇らせてゐるばかりであつた。

が、その内に眼の下部落からは、思ひもよらない火事の煙が、風の斷えた中空へ一すぢまづ直に上り始めた。老人はその煙の中に立ち昇る火の粉を眺めても、やはり膝を抱きながら、氣樂そうに小聲の歌を唱つて、一向驚くらしい氣色も見せなかつた。

この後、素盞鳴を翻弄した姪を抱きとめる場面が続く。思兼は歩き思索する者であるが、姪への対応もあわせ、自ら動く存在ではないといえる。それは素盞鳴をどう裁くかで合議制を重んじ、我を通

しきらないところからも読み取れる。

三―二、素盞鳴の巡礼的歩行

――歩行を通してみる、巡礼者へと志向する素盞鳴――

では次に素盞鳴の歩行について整理していく。《素盞鳴尊》では素盞鳴が歩く場面がいくつかある。例えば素盞鳴は冒頭、遊ぶ仲間たちへ追従するように歩いている。一方で仲間たちとの関係に亀裂が入ってからは部落の者とは距離をおき、一人で自然に親しみ、山中で悩みを抱くようになる。そして高天原の国を追放されて以降、自然のなかで寂しさを感じる描写がある。しかしつづきに見ていくと、素盞鳴が歩行して何か思索したり、葛藤したりといった描写はほとんどない。

素盞鳴の歩行の描写を整理すると、三つに分けられると考える。一つが方向性（思想や思惑）の一致、不一致といった立場の違いを示すもの。一つが単なる動作。一つがそれ以外である。それ以外としたのは、思索的というほど思考は深くなく、素盞鳴が何かについて感じている、感情があるという程度であるためだ。

次から素盞鳴の歩行の実態を丁寧に拾い上げていく。

先に述べた通り、素盞鳴にはさまざまな歩行が見られ、それが大別して三つに分けられると考える。単なる動作は除外して、それを次に掲げる。

○立場の違い

では、まず立場が違う時の歩行について見ていく。「彼は腹立たしさうにかう云ふとくると若者に背を向けて、大股に嘖き井から

歩み去つた」(連載回数十五)という文からは牛飼いの若者への隠しきれない反感を読み取ることができる。しかし合意後は「彼等は倭衣の肩を並べて、絶え間なく飛び交ふ燕の中を山の方へ歩いて行つた」(連載回数十五)とあるように、同じ方向へ歩いていく。

一方で、牛飼いの若者が素盞鳴を裏切る選択を明確にしたときには「相手が歩き出すと、彼も亦その後から、重さうな足を運び始めた」(連載回数十六)と、裏切る相手である風流な若者への追従とその後味の悪さを感じていることが読み取れる。

その間、素盞鳴は牛飼いの若者が思兼の姪とうまく取り次いでくれていると信じている。そのため、「河原を元來た方へ歩き出した」(連載回数十七)り、「山へ寝鳥でも捕えに行かうと思つて、月明りを幸、部落の往来を獨りぶらぶら歩いてゐる」(連載回数十八)たりと裏切られていることについて気づくことなく、一人で孤独にいる。そして裏切りに気がついてからは「牛飼ひの若者がたつた一人住んでゐる、其處を餘り離れてゐない小家の方へ歩き出」(連載回数十九)すなど、牛飼いの若者への反感が明確に向いていく。

そして高天原を離れてからは、「老婆の挨拶には頓着なく、大股に洞外へ歩を運んだ」(連載回数二十七)とあるように、老婆を同じ立場にあるとも思っていないため無視をし、また穴居部族である女たちへの反感から外へ動いている。そして一回目の洞穴からの脱出を図つたときには「彼は後も振返らずに、夜が明けるまで歩み續けた」(連載回数二十八)とあり、ここでも明確に穴居部族である女たちへの反感が示されている。

次に、感情面や思考面が強く現れている素盞鳴の歩行について丁寧に見ていく。

○感情、考える場面

思兼の姪について考えているときには「ある日の日暮、天の安河の河原を歩いてゐる」(連載回数十七)とあり、これは二人の初対面の場所である。そして思兼の姪や自身の幸福について考えているときには「彼は頭を挙げて歩きながら、危く霞に紛れさうな雲雀と時々話をした」(連載回数十七)とのんびりと歩いている。その恋にやぶれ、高天原で求める幸福が得られないと悟つたとき、「素盞鳴よ。お前は何をさがしてゐるのだ。おれと一しよに来い。おれと一しよに来い。素盞鳴よ。……」／彼は漸く立ち上つた。さうしてまだ知らない國の方へ、徐に山を下り出した」(連載回数二十三)と未練を断ち切り歩き出していく。しかし様々な思い出のある高天原との別れ、そしてその理不尽さに「彼は齒を食ひしぱりながら、足もとばかり見つめて歩いた」(連載回数二十三)のである。ここからは自身の正当性に対する信頼と、その正当性が認められなかったことへの怒りが読み取れる。

高天原を出て、洞穴からの一回目の脱出時の「彼は休みなく進み續けた。彼の心の内には相不変鬱勃として怒が燃え上つてゐた。が、それにも關らず、この荒れ模様の森林には、何か狂暴な喜びを眼ざまさせる力があるらしかった。彼は草木や蔦蘿を腕一ぱいに掻きのけながら、時々大きな聲を出して、吼つて行く風雨に答へたりした」(連載回数二十四)とあるように風景描写に心情を重ねている。歩行して消化しきれない怒りを発散させている様子が見てとれる。

以上のように、詳細に見るとこのように大別できると考えられ

る。しかしこうしてみると、思兼が自身に対して冷徹な視線と認識を持つているのに対して、素盞鳴はそこまで到達していないことがわかる。

ここで先に挙げた場面を思い返したい。それは思兼が姪を片手に抱いて、「火を弄ぶものは、気をつけないと、——素盞鳴尊ばかりではない。火を弄ぶものは、気をつけないと——」と述べている箇所である。この火がダブルミーニングであることは間違いないだろう。ここでの火は火および力と恋を表している。したがってここで気をつけるように言われているのは素盞鳴と、戦っている若者たちに加えて姪も含まれる。思兼は姪が素盞鳴の恋心を弄んだことを理解しているのである。一方素盞鳴は牛飼いの若者に告げられるまで、姪が素盞鳴をどう思っているか、ほとんど考えていない。素盞鳴は思兼と違い、冷徹に思索する眼差しを持ちえていないことが明白にわかる。

これは素盞鳴の一代記としてまだ素盞鳴が反抗から成熟へと向かっていく過程にあるからとも考えられるが、加えて、素盞鳴自身が人間でありつつも、思兼のような知識人ではなく、自然に暖かさと寂しさを感じ、恋をし、失恋し、墮落する、ごく普通の人間であるためではなからうか。素盞鳴はどこまでも普通の人間で、そのため何かにすがりつかない。思兼のような思考はなく、代わりに素盞鳴にあるものは後述するとした風の嘯きである。思兼ほど思考し葛藤できない素盞鳴を風が嘯いて導き続ける。そして素盞鳴が導かれ無意識下で求め続けたものが「爐辺の幸福」である。つまり家庭の小さな幸せなのである。それを求めて素盞鳴は七年間の漂泊を行う。

そこで「爐辺の幸福」について整理すべく、前述したその前段階にある火雷命の高麗剣の場面に触れる。火雷命といえは『古事記』に照らせば、黄泉にいったイザナミの胸に化生した神である。典拠の一つである『古事記』を考えるとイザナミ、つまりスサノヲの母を想起させるシンボルの一つ足り得ると考える。素盞鳴の母も亡くなっていることが作中示されている。母の胸もまた強く母を想起させるシンボルとなりえる。シンボルとして示される母という存在。そして作中で示されてはいないが、かつてあったかもしれない「爐辺の幸福」を求めて、素盞鳴は火雷命という存在が地中深くに突き刺した高麗剣——韓国由来の古代の刀剣であり、素盞鳴の故郷が異国であること、『日本書紀』でスサノヲと韓国の関係性が示されている以上、『日本書紀』を強く意識した物品である——をその剛力で「渾身の力をこめながら一気とその剣を引き抜いた」ことから「爐辺の幸福」への志向が強くと表れていると読み取れる。高天原で素盞鳴は孤独であり、人を避けていた。その結果、自然しか寄る辺がなく、母がいないことに大きな悲しみを感じている。そういった時に風の嘯きがあることから、風の嘯きは「爐辺の幸福」への志向であるとできるだろう。加えて連載回数三十六では「彼は新しい妻と共に、静な朝夕を送り始めた。風の聲きも、浪の水沫も、或は夜空の星の光も、今は再彼を誘つて、廣漠とした太古の天地に、さまよわせる事は出来なくなつた」とあり、「爐辺の幸福」を得てからは風の嘯きがなくなることからも素盞鳴が無意識下で求めていたと考えられる。三好行雄は「爐辺の幸福」について「妻を擁し、子を抱いて営まれる家庭の凡常な幸福」と述べている³¹。高天原にいた時点から孤独であり風の嘯きを聞き続けていたことは素盞鳴が無意識

化で「爐辺の幸福」を欲求していたということであり、実際に思兼の姪に対して恋心を抱き、「おれは莫迦だ。あの娘はたとひ生まれ變わつても、おれの妻になるやうな女ではない」(連載回数十七)とあるように家庭への志向も初期の段階ですでに示されているのである。

自身で思索する力が思兼ほどにない素盞鳴にあつた風の囁き、そして火雷命の暗示、それゆえに素盞鳴の「神々はおれを守つて居て下さる。(中略)天上の神々に祈りを捧げた」(連載回数三十二)という描写に結びつくのである。これまで素盞鳴を人間として強調するために神から距離をおいてきたにもかかわらず、火雷命の登場から、上位存在としての神を強調していることがわかる。それは次の連載回数三十一に象徴的だ。

彼は喜びに戦いた。戦きながらその言葉の威力の前に圧倒された。彼はしまい塞ごうとした。が、自然は語り続けた。彼は嫌でもその言葉に、じつと聞き入るより途はなかった。

湖は日に輝きながら、澁瀬とその言葉に応じた。彼は——その汀にひれ伏している、小さな一人の人間は、代る代る泣いたり笑つたりしていた。が、山々の中から湧き上る声は、彼の悲喜には頓着なく、あたかも目に見えない波濤のように、絶えまなく彼の上へ漲つて来た。(連載回数三十一)

これらの点から素盞鳴の歩行について巡礼者という視点で考えていきたい。

注目したいのが二十四と三十一の場面の対比性である。どちらも

激しい自然の描写があり、二十四では怒りのままに自然を薙ぎ払わんとする勢いで歩いてきたが、三十一では素盞鳴は動かない。「自己に対する、憤懣」を抱きつつも「黙然と坐」り、「ひれ伏して」、自然の声をただ聞くのである。そこには内発的な葛藤や疑念はなく、まるで啓示である。

その後、三十三では風の囁く「素盞鳴よ。お前は何を探しているのだ。おれと一しよに来い。おれと一しよに来い。……」という言葉通りに素盞鳴の七年にわたる漂泊がある。

レベッカ・ソルニットが歩行と巡礼について次のように述べている。^③

「歩くことのもつとも基本的な様式のひとつは巡礼だ。触れえぬ存在を求めて歩くこと」であると述べている。素盞鳴の歩行はこの巡礼に近いのではないか。素盞鳴にとって「爐辺の幸福」が縁遠く、「触れえぬ存在」であるのは『古事記』においてスサノヲが神であるという前提があるためである。日本神話においてスサノヲに幸福は不要だった。人間になつてはじめて「爐辺の幸福」は完全に縁遠いものではなくなったのである。

素盞鳴に巡礼を想起させるのは先に挙げた「神々はおれを守つて居て下さる。(中略)天上の神々に祈りを捧げた」というところによる。そして素盞鳴に巡礼が必要なのは、風の囁きによって示される現状に対する不足であり、得られない「爐辺の幸福」を得るためである。スサノヲの悲劇は母のいないことであり、父からも姉からも見放されたことである。そして素盞鳴の悲劇は高天原での冷遇、失恋、追放であり、高天原でも、洞穴でも「無感受性は、当座の間彼を苦しめた」(連載回数二十九)とあるように孤独を感じてい

たことである。孤独を癒し「爐辺の幸福」を求めることこそが素盞鳴にとつての巡礼であり、「触れえぬもの」を求める旅であり、そのための漂泊なのである。

それ以来彼はたつた一人、或時は海を渡り、或時はまた山を越えて、いろいろな國をさまよつて歩いた。しかしどの國のどの部落も、未嘗彼の足を止めさせるには足らなかつた。それらは皆名こそ變つてゐたが、其處に住んでゐる民の心は、高天原の國と同じ事であつた。彼は——高天原の國に未練のなかつた彼は、それらの民に一臂の力を借してやつた事はあるても、それらの民の一人となつて、老いよふと思つた事は一度もなかつた。「素盞鳴よ。お前は何を探してゐるのだ。おれと一しよに來い。おれと一しよに來い。……」

彼は風が囁くままに、あの湖を後にして（連載回数三十三）

漂白にあたつての描写は以上である。漂白に際して具体的な思想はなく、ただ共同体に組み込まれずに、風の囁きに従うのみである。そしてようやく足を止めたのが櫛名田姫を狙う大蛇の話聞いたところである。そこで足を止めたのは「神々の謎を解く」ためである。ここにいたつて素盞鳴は、櫛名田姫を犠にするのか、櫛名田姫をデゴイに大蛇を退治させ素盞鳴に「爐辺の幸福」を得させようとするのが神の考えなのか、自身の力でその謎を解く。というより自身の力で困難を打破すべく、大蛇に闘いを挑むことになる。

ここに素盞鳴が神々を信じ、巡礼してきた集大成がある。大蛇退治の削除について長野晋一は否定的であつた。しかしここで重要な

のは大蛇が退治されることやその詳細などではなく、巡礼によつて素盞鳴が主体的に動き、自らの力で櫛名田姫を救い、神々の謎を解き、「爐辺の幸福」を得ることなのである。そのために素盞鳴を英雄に仕立てあげるような大蛇退治の場面は、巡礼者であり、人間である素盞鳴にとつて不要であつたといえるだろう。

四、「我が素盞鳴」という表現から考える、素盞鳴像について

——櫛名田姫と須世理姫との別れに伴う

「爐辺の幸福」の喪失と決別——

次に大蛇退治後の場面を確認したい。櫛名田姫存命中は「彼は妻に優しかつた。聲にも、身ぶりにも、眼の中にも、昔のような荒々しさは、二度と影さへも現さなかつた」（連載回数三十六）とある。このように「爐辺の幸福」を見出した素盞鳴からは「野性」が身を潜めるようになる。しかし櫛名田姫の死とともに、須世理姫と無人島へ移住して以来、素盞鳴の「野性」が再び目を覚ます。そしてこの場面では葦原醜男が登場する。その登場場面で素盞鳴は自身の「青年時代そのものが現れたように見え」（連載回数三十八）る。先んじて述べておくと葦原醜男に対して自分を重ねて見たのである。そのような描写はほかにもある。決定的なのは、「白銅鏡が一面のせてあつた。彼はその岩の前に足をとめると、何気なく鏡へ眼を落した。鏡は冴え渡つた面の上に、ありありと年若な顔を映した。が、それは彼の顔ではなく、彼が何度も殺さうとした、葦原醜男の顔であつた」（連載回数四十五）という場面である。

素盞鳴は娘を奪われたくないがために何度も殺害を試みる。しかし火による殺害に成功したと思つた素盞鳴は「云ひやうのない寂し

さがかすかに湧いて来るような心もち」(連載回数四十三)になるのである。これは素盞鳴が葦原醜男を、娘を奪っていく忌まわしい存在と思いつつも、度重なる試練にも耐え、快活さを失わない様子から娘の夫たり得る可能性を認め始めていたからではないか。そして素盞鳴は先に挙げた鏡の場面で、葦原醜男と自身を同一視する。しかし素盞鳴は「おれに何の罪があるか？ おれは彼等よりも強かつた。が、強かつたことは罪ではない。罪は寧ろ彼等にある。嫉妬心の深い、陰險な、男らしくもない彼等にある。」(連載回数四十五)と夢のなかで憤るのである。

素盞鳴は巡礼という漂泊をし、「爐辺の幸福」を得た。それを可能な限り保ち続けるつもりであつたろう。しかし前述した鏡の場面で実際に鏡を見て素盞鳴は、葦原醜男を冷遇する、自身の行いそのものと高天原で冷遇された自身が重なって見えた。つまり、この鏡の場面は自身が敵視していた存在に自らがなっていたことに気がついた描写であると言える。先に挙げた斎藤英喜の、怪物と英雄の類似性という指摘によれば大蛇退治に代わるほどの重要な場面と言えるだろう。

目覚めた素盞鳴は騙された怒りから、高麗剣を持ち須世理姫と葦原醜男を見渡せる場所へ急ぐ。

『古事記』でのこの場面においてササノヲが保持し、そこからアシハラノシコヲが持つていくのは天生太刀と生弓矢、天詔琴である。そして『日本書紀』の場合は根の国の段がないため、ここに該当する品はない。少し脱線するが確認しておきたいのは、ここで葦原醜男は素盞鳴の貴重な物品を持つていかなかったということである。素盞鳴が目覚める場面も『古事記』の天詔琴の音ではなく自発的な

ものである。持つていかないということは、葦原醜男が大国主になって兄弟たちを従え、葦原中国を平定する神話である必要性を『素盞鳴尊』がもつていないことを明示しているといえる。

川副武胤は特に「老いたる素盞鳴尊」の部分に注目して手厳しく批判している。具体的には『古事記』と比べ説明が多く冗長かつ平板な印象となつていっていると述べている。その理由は、アシハラノシコヲが無人島を訪れることに物語の必然性が欠けているためであると述べる。芥川に根堅洲国が見えていなかったため世代や父子間の断絶を際立たせる効果が希薄化し、位相の平板化を招いてしまったと批判する³⁵⁾。

つまり、アシハラノシコヲの視点が欠けてしまったために異世界をまたぐ緊張関係がなくなり、「老いたる素盞鳴尊」で葦原醜男が無人島に現れる必然性がなくなつてしまい、冒険物語の世界になつてしまつていいる。アシハラノシコヲへの試練も父子間の争い以外にあった異界性の差異などの緊張関係がないということ述べているのである。

しかしササノヲが人間化されたことから神話である必要性を失つたために、異世界ではなく無人島へ根の堅洲国が移されたのであり、「位相の平板化」はさほど問題でないと考える。

脱線してしまつた流れを戻す。素盞鳴は怒りから高麗剣を抜き、二人を見渡せる場所へ急ぐ。この場面で素盞鳴の唇に浮かんだ微笑は印象的である。そして素盞鳴は二人を言祝ぐ。その言葉に次に掲げる。

「おれはお前たちを祝ぐぞ。おれよりも強くなれ。おれよりも

賢くなれ。さうしておれよりも仕合せになれ。」

彼の言葉は風と共に、限らない海原の空へ揚つた。この時わが素盞鳴は、彼の多端な生涯を通じて、如何なる瞬間よりも偉大であつた。

こうして素盞鳴は二人を見送る。

櫛名田姫との生活で得たのが「爐辺の幸福」である。その櫛名田姫の死後、素盞鳴は度々、「野性」——精神性と力を指す——を取り戻す。このことから「野性」と「爐辺の幸福」は反比例する存在と言えるだろう。それは次の場面からわかる。

彼は新しい妻と共に、靜な朝夕を送り始めた。風の聲も、浪の水沫も、或は夜空の星の光も、今は再彼を誘つて、廣漠とした太古の天地に、さまよわせる事は出来なくなつた。既に父となろうとしてゐた彼は、この宮の太い棟木の下に、——赤と白とに狩の圖を描いた、彼の部屋の四壁の内に、高天原の國が與えなかつた。爐辺の幸福を見出したのであつた。／彼等は一しよに食事をしたり、未来の計畫を話し合つたりした。時々宮のまはりにある、柏の林に歩みを運んで、その小さな花房の地に落ちたのを踏みながら、夢のやうな小鳥の暗く聲に、耳を傾ける事もあつた。彼は妻に優しくあつた。(中略)しかし死は素盞鳴夫婦をも赦さなかつた。(中略)彼は喪屋が出来る、と、まだ美しい妻の死骸の前に七日七晩坐つたまま、黙然と涙を流していた。／宮の中はその間、慟哭の聲に溢れていた。殊に幼い須世理姫が、しつきりなく歎き悲しむ聲には、宮の

外を通るものさへ、涙を落さずにはいられなかつた。彼女は——この八島土奴美のたつた一人の妹は、兄が母に似てゐる通り、情熱の烈しい父に似た、男まさりの娘であつた。(中略)須世理姫はかう云ふ生活の中に、だんだん男にも負けないやうな、雄々しい女になつて行つた。しかし姿だけは依然として、櫛名田姫の面影を止めた、氣高い美しさを失はなかつた。(連載回数三十六—三十七)

このように、妻との生活で「爐辺の幸福」を見出したものの、その死は素盞鳴に大きな悲しみを与え、姿が妻に似た娘を伴つて無人島へ移住するのである。素盞鳴が姿の美醜に意識を向ける人物であることはすでに確認した。こうして素盞鳴は失われようとする「爐辺の幸福」をなんとか続けようとした。

しかし須世理姫の成長に伴い、素盞鳴は「野性」を取り戻していく。つまり須世理姫が年頃になるにつれ「野性」は強化されていった。「爐辺の幸福」と「野性」が反比例するものと考え、さらに「爐辺の幸福」は失われていくことになる。ここには娘を奪われる危機感の増大とそれによる「野性」の強化が同時にあつたと考える。

しかし素盞鳴は末尾において須世理姫と葦原醜男を祝福する。素盞鳴は「野性」と怒り、そして保とうとし続け、わずかに残されていた「爐辺の幸福」を手放すのである。高天原で自身がされたことを再演しないために、二人を祝福してその幸福を願うという選択肢を素盞鳴は取らざるを得なかつたのである。

素盞鳴は長い苦しみの果てに「爐辺の幸福」を得た。そうして得た「爐辺の幸福」の落とし種を次に託したのである。それは葦原醜

男と自身の類似性に気がついたためであり、大蛇退治にも代わる重要な主題の一つである。素盞鳴が蔑んでいた高天原の国の者と同じ行為はしないという決意であり、ここに素盞鳴の「爐辺の幸福」との決別が成されたと言えるだろう。「わが素盞鳴」という表現はここで活きてくる。まさしく、新聞読者の読んだ、そして芥川の描いた素盞鳴は、「爐辺の幸福」を求めつつもそれを手放すその瞬間こそが最も「偉大」なのであり、その時、それまでの素盞鳴の苦しみと巡礼が結実したのである。

おわりに

以上のことから人間として描写され続けてきた素盞鳴は神に守られていると祈りを捧げ巡礼という漂泊を行い人間であり続けた。素盞鳴が神に近づくことはあっても、神になることはなくあくまで人間のままであったのである。《素盞鳴尊》ではスサノヲを風の神と見立てた風景描写が多くある。つまり神へ限りなく接近したのである。しかしそこを神にせず、人間のままで結末を迎えたことの意義は深い。論者は《素盞鳴尊》では「野性」と「爐辺の幸福」は反比例するものであり、スサノヲは神であったからこそ「爐辺の幸福」は触れえぬものであったと考えている。しかし芥川によって人間として描きなおされ、それにより「爐辺の幸福」を手にした。そして巡礼してまで渴望した「爐辺の幸福」を手放すことのできる瞬間が偉大なのだと描き得た作品であると考え。初出では最後の場面は次のようになっている。³⁴

素盞鳴は高麗剣を堤げた儘、眉の上に手をかざして、遙にこの獨木舟の帆を眺めた。帆は彼を嘲けるやうに、眩く日の光に輝いてゐた。が、彼の眼の中からは、次第に燃えるやうな怒が消えて行つた。いや、彼の唇には、程なく微笑さへも浮んで來た。彼はさつき夢の内に、怪しい鏡を覗いた時の如くあの精悍な葦原醜男の中に、始めて年少な彼自身を見出すことが出來たのであつた。

「おれはお前たちを祝ぐぞ。おれよりも強くなれ。おれよりも賢くなれ。さうしておれよりも仕合せになれ。」

彼の言葉は風と共に、限らない海原の空へ揚つた。この時わが素盞鳴は、彼の多端な生涯を通じて、如何なる瞬間よりも偉大であつた。

以上のように結ばれている。このことから、素盞鳴を人間として、そして守つてきた「爐辺の幸福」を手放す選択肢を取ることができる存在として描写したと分かる。それは姪が素盞鳴の気持ちを手伝うことを知りながら抱きとめた思兼とは異なつた存在であると言えるだろう。思兼は現状維持の存在であり、前述した魚の話のように英雄、「行為者」にはなれなかった。一方、素盞鳴は「偉大」な存在として描写された。素盞鳴に残された最後の「爐辺の幸福」を手放し、娘とその娘を奪つていく男を祝福する。それは素盞鳴にとつて「野性」も「爐辺の幸福」も手放すことであり、全てを失うことに等しい。だからこそ自分より幸せになるようにと言葉をかけた、その姿が素晴らしいのである。「わが素盞鳴」は『古事記』の

スサノヲと比べるとささやかな存在だろう。しかし素戔鳴は苦境に喘ぎ、時には挫折し苦しみながらも人として巡礼し、触れえぬ「爐辺の幸福」を求め、そして得たものを手放せる存在として結末を迎えた。素戔鳴の人間化によって《素戔鳴尊》では、小さな、しかし確かに「偉大」な英雄の姿が描きだされたと言える。そしてそれは、これまで自明化され明らかにされてこなかった母親欠乏、大人にならない、永遠の子供、嵐の神、そのいずれとも異なる、父親として、人間として偉大な素戔鳴像を提出することに成功したといえる。

【引用参考文献】

- (1) 赤松優香「『古事記』・『日本書紀』と芥川龍之介の小説『老いたる素戔鳴尊』」『都留文科大学大学院紀要』都留文科大学 (1011) p.35-39
- (2) 今回は「大阪毎日新聞」夕刊の初出をテキストとして用いている。そのため全集の「老いたる素戔鳴尊」の素戔鳴ではなく、「素戔鳴」に表記を準じる。
- (3) 『芥川龍之介全集』第二十三巻 岩波書店 (一九九八) p.386 による。二十三巻の「後記」によると後に言及する「手帳二」は大正七、八年頃の記述で、その最初の方に記載されていることから大正七年のメモと推測される。したがって構想から二年経っている想定できる。
- (4) 同 (3) 二十四巻 pp.294-299
- (5) 同 (3) 十九巻「大正九年」p.39-60による。多くの研究者
- (6) 長野誉一「古典と近代作家―芥川龍之介」『第十二章 素戔鳴尊』有朋堂 (一九六七) p.240によると芥川は「素戔鳴尊」の前に「邪宗門」「路上」の続編を中絶している。
- (7) 同 (3) 二十三巻 p.286
- (8) 早澤正人「素戔鳴尊」論―〈父性原理〉と〈母性原理〉をめぐる問題―『日本近代文学・研究と批判』ソウル・図書出版四十八巻 (二〇一五) p.193では「一代記」という言葉は見えないものの、「成長過程」として言及している。一方で田中千晶 (二〇〇九) は「一代記」として述べて断定している。
- (9) 斎藤英喜『読み替えられた日本神話』講談社 (二〇〇六) p.16
- (10) 同 (9) p.230による。
- (11) スサノヲはどういった神であるのかという議論は近年でも続けられ、ここで挙げ始めるとキリがないが、嵐の神、葦原中国の神、根の国の神、鉄の神、韓国の神であったとする説など、実にさまざまな説が挙げられた。
- (12) 片岡懋「素戔鳴尊」『老いたる素戔鳴尊』の意味『駒澤國文』(一一一) 駒澤大学文学部国文学研究室 (一九八四) p.39,42
- (13) 鶴田欣也『日本近代文学における『向う側』』(世界の日本文学シリーズ2) 明治書院 (一九八六) p.175
- (14) 槇本敦史「芥川龍之介——『素戔鳴尊』論」『解釈』四十六巻通巻五四四・五四五集 解釈学会 (二〇〇〇)
- (15) 廣田卓也「芥川龍之介の世界——〈老人〉と〈青年〉と」『滋

賀大学大学院教育学研究科論文集』七 滋賀大学大学院教育学部 (二〇〇四)

- (16) 同 (5) 大正九、三、二十七 薄田泣菫宛書簡 p.33 に現れる語彙による。

- (17) 同 (6) pp.253-261

- (18) 同 (3) 十八卷 p.192 (大正七、一、五) 松岡譲宛書簡。p.208 (大正七、四、二十四) 薄田泣菫宛書簡。p.227 (大正七、七、三十一) 薄田泣菫宛書簡より。

- (19) 注目されている「ユーディット」の一節を次で挙げておく。「ユーディット」は神にも多く言及する戯曲である。

本當に、俺に刃向う一人の敵、せめて一人の敵でも、あつて呉れば好いが！ 俺はその男に接吻してやりたい！ 俺は烈しい斬り合いの後に彼を大地に打ち倒したら、自分も其奴の上に倒れて一緒に死んでみたいのだ！

力だ！ 力だ！ これこそ俺の求めているものだ！ 俺に刃向い、俺を撃ち殺すことのできる男が来ればよいが！ 俺はそういう男を憧憬している！ 自分より他に何者をも崇めることができぬとは、寂しい男は俺を白で碾き碎き、彼の氣に入るなら、その粥で、俺が人類のなかに開けた大穴を塞いでみるが宜い。

たしかにこの文章からは力が連想される。
フリードリヒ・ヘッペル著・吹田順助訳『ユーディット 他一篇』

岩波書店 (一九五二) 第一幕 p.13・第五幕 p.18 より。

- (20) 遠藤浩「スサノオと反近代の造型―芥川・折口・古井―」『明治大学日本文学』明治大学日本文学研究会 (一九九六) pp.78-80

- (21) 清水康次「『野性』の系譜」宮坂覺編『芥川龍之介：理智と抒情』有精社 (一九九二) pp.7-8, 14

- (22) 同 (13) p.184

- (23) 田中千晶「近代における『古事記』の享受に関する研究」学位申請論文甲南女子大学 (二〇〇九) p.57
<https://core.ac.uk/download/pdf/234574304.pdf>

- (24) 同 (1) では神の名前表記、刀の種類 (韓国を意識している)、『日本書紀』中の「年已に長いたり」という表現が「老いたる素盞鳴尊」と関連することを受けて、『日本書紀』も要素として使用されており、『古事記』だけを典拠とするには不足があると指摘した。また柳田國男との座談会 (東雅夫『文豪たちの怪談ライブ』ちくま書房 (二〇二二)) や「猪」「神々の微笑」という小説からも著者が『日本書紀』を読み込んでいることがわかる。

- (25) 東雅夫『文豪たちの怪談ライブ』ちくま書房 (二〇二二) p.318-319, 327

- (26) 同 (3) 十九卷 p.33 (大正九、三、二十七) 薄田泣菫宛書簡。および同著、p.38 (大正九、四、二) 岡栄一郎宛書簡による。

- (27) 今回は素盞鳴を強者としたが、ここでは大気都姫たちが強者ともとれる。それは犬との獣姦しかり、そこでの生活の主導権は女性たちが握っていたとも考えられるためである。

(28) ここではスサノヲの母がイザナミであるのかには折口の意見もあり、断定することはできない。ここでは一定の理解となっているイザナミをスサノヲの母とする見方を採用することとする。

(29) 同(3) 四卷「樗牛の事」p.151によると芥川も読んだであろう『樗牛全集第3巻(史論及史伝)増補』の「古代神代巻の神話及歴史」という論のp.809で高山樗牛がスサノヲ＝嵐の神説を唱えている。次の通りである。

天地の神に次で最も崇敬せらるゝものは何れの国の神話にありても太陽なり。(中略)我が天照大神と均しく太陽の神也。(中略)印度の因陀羅に於て嵐神の著しきものを見る。是れ須佐之男命に相應する者也。(傍点原文ママ)(高山林次郎「古事記神代巻の神話及歴史」は『中央公論』14(3)(一八九九) pp.7-17が初出である。)

ここでは比較神話の観点を取り入れながら、アマテラスと太陽、スサノヲと嵐を同一視する視点がある。この影響はやはりあつたとみるべきであろう。しかしあくまで人間として描ききろうとされているのが、『素戔鳴尊』での試みと考える。

(30) 同(21) p.6-7

(31) 三好行雄「地底に潜むもの——『南京の基督』前後」『芥川龍之介論第三巻』筑摩書房(一九九二) p.182

(32) レベッカ・ソルニット『ウォークス 歩くことと精神史』左右社(二〇一七) p.78

(33) 川副武胤「日本神話と近代思想——鵜外『かのように』と芥川龍之介『老いたる素戔鳴尊』」『山形大学紀要』山形大学(一九八二) pp.134-143

(34) 同(3) 六卷「老いたる素戔鳴尊」pp.195-196では「天上の神神」という語彙を用いて次のように結ばれている。

宮のまはりの棕の林は、彼の足音に鳴りどよんだ。それは梢に巢食つた栗鼠も、ばらばらと大地に落ちる程であつた。彼はその棕の木の間を、嵐のやうに通り返けた。

林の外は切り岸の上、切り岸の下は海であつた。彼は其処に立ちはだかると、眉の上に手をやりながら、広い海を眺め渡した。海は高い浪の向うに、日輪さえかすかに蒼ませてゐた。その又浪の重なつた中には、見覚えのある独木舟が一艘、沖へ沖へと出る所だつた。

素戔鳴は弓杖をついたなり、ぢつとこの舟へ眼を注いだ。舟は彼を嘲るやうに、小さい箆帆を光らせながら、軽々と浪を乗り越えて行つた。のみならず舳には葦原醜男、鱸には須世理姫の乗つてゐる容子も、手にとるやうに見る事が出来た。

素戔鳴は天の鹿兒弓に、しづしづと天の羽羽矢を番へた。弓は見る見る引き絞られ、鏃は目の下の独木舟に向つた。が、矢は一文字に保たれた儘、容易に弦を離れなかつた。その内にいつか彼の眼には、微笑に似たものが浮び出した。微笑に似た、——しかし其処には同時に又涙に似たものも

ないではなかった。彼は肩を聳やかせた後、無造作に弓矢を抛り出した。それから、――さも堪へ兼ねたやうに、瀑よりも大きい笑ひ声を放った。

「おれはお前たちを祝ぐぞ！」

素戔鳴は高い切り岸の上から、遙かに二人をさし招いた。

「おれよりももつと手力を養へ。おれよりももつと智慧を磨け。おれよりももつと、……」

素戔鳴はちよいとためらった後、底力のある声に祝ぎ続けた。

「おれよりももつと仕合せになれ！」

彼の言葉は風と共に、海原の上へ響き渡った。この時わが素戔鳴は、大日靈貴と争った時より、高天原の国を逐はれた時より、高志の大蛇を斬った時より、ずつと天上の神に近い、悠々たる威厳に充ち満ちてゐた。

受領日…二〇二三年一〇月二六日

改定日…二〇二三年一月二八日

受理日…二〇二三年二月二日